

## どちらが本物か

加藤 享

### 【聖書】列王記上18章20～40節

アハブはイスラエルのすべての人々に使いを送り、預言者たちをカルメル山に集めた。

エリヤはすべての民に近づいて言った。「あなたたちは、いつまでどっちつかずに迷っているのか。もし主が神であるなら、主に従え。もしバアルが神であるなら、バアルに従え。」民はひと言も答えなかった。エリヤは更に民に向かって言った。「わたしはただ一人、主の預言者として残った。バアルの預言者は四百五十人もいる。我々に二頭の雄牛を用意してもらいたい。彼らに一頭の雄牛を選ばせて、裂いて薪の上に載せ、火をつけずにおかせなさい。わたしも一頭の雄牛を同じようにして、薪の上に載せ、火をつけずにおく。そこであなたたちはあなたたちの神の名を呼び、わたしは主の御名を呼ぶことにしよう。火をもって答える神こそ神であるはずだ。」民は皆、「それがいい」と答えた。エリヤはバアルの預言者たちに言った。「あなたたちは大勢だから、まずあなたたちが一頭の雄牛を選んで準備し、あなたたちの神の名を呼びなさい。火をつけてはならない。」彼らは与えられた雄牛を取って準備し、朝から真昼までバアルの名を呼び、「バアルよ、我々に答えてください」と祈った。しかし、声もなく答える者もなかった。彼らは築いた祭壇の周りを跳び回った。真昼ごろ、エリヤは彼らを嘲って言った。「大声で呼ぶがいい。バアルは神なのだから。神は不満なのか、それとも人目を避けているのか、旅にでも出ているのか。恐らく眠っていて、起こしてもらわなければならないのだろう。」彼らは大声を張り上げ、彼らのならわしに従って剣や槍で体を傷つけ、血を流すまでに至った。真昼を過ぎても、彼らは狂ったように叫び続け、献げ物をささげる時刻になった。しかし、声もなく答える者もなく、何の兆候もなかった。

エリヤはすべての民に向かって、「わたしの近くに來なさい」と言った。すべての民が彼の近くに來ると、彼は壊された主の祭壇を修復した。エリヤは、主がかつて、「あなたの名はイスラエルである」と告げられたヤコブの子孫の部族の数に従って、十二の石を取り、その石を用いて主の御名のために祭壇を築き、祭壇の周りに種二セアを入れることのできるほどの溝を掘った。次に薪を並べ、雄牛を切り裂き、それを薪の上に載せ、「四つの瓶に水を満たして、いけにえと薪の上にその水を注げ」と命じた。彼が「もう一度」と言うと、彼らはもう一度そうした。彼が更に「三度目を」と言うと、彼らは三度同じようにした。水は祭壇の周りに流れ出し、溝にも満ちた。献げ物をささげる時刻に、預言者エリヤは近くに來て言った。「アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ、あなたがイスラエルにおいて神であられること、またわたしがあなたの僕であって、これらすべてのことをあなたの御言葉によって行ったことが、今日明らかになりますように。わたしに答えてください。主よ、わたしに答えてください。そうすればこの民は、主よ、あなたが神であり、彼らの心を元に戻したのは、あなたであることを知るでしょう。」すると、主の火が降って、焼き尽くす献げ物と薪、石、塵を焼き、溝にあった水をもなめ尽くした。これを見たすべての民はひれ伏し、「主こそ神です。主こそ神です」と言った。エリヤは、「バアルの預言者どもを捕らえよ。一人も逃がしてはならない」と民に命じた。民が彼らを捕らえると、エリヤは彼らをキシオン川に連れて行って殺した。

### 【序】カルメル山の対決

北王国第7代の**アハブ王**はシドン王の娘**イゼベル**を王妃に迎えました。彼女は都の

サムリアに自分が信じる**バアルの神殿**を建て祭壇を築いて、その信仰を熱心に広め始めました。バアルは**大地の生命力を象徴する神**と信じられていました。夫のアハブも彼女に追従して、バアルの祭壇の傍らに**豊穡の女神アシェラ像**を造りました。そしてイゼベルは**主の預言者を迫害**して、絶滅させようとしていました。

神は預言者**エリヤ**をアハブ王に遣わして**神の裁き**を宣告させ、露も雨も降らない**飢饉**が続きました。エリヤは2年間身を隠していましたが、**3年目**に再び王の前に現れます。「お前か、イスラエルを煩わせる者よ」エリヤは言い返しました。「主の戒めを捨てバアルに従っている**あなたこそ**、イスラエルを煩わしているのだ」

エリヤは**カルメル山**に、イゼベルの庇護を受けている**バアルとアシェラの預言者全員 850人**を集め、自分と**対決**するよう王に求めました。そしてイスラエルの民たちに申しました。「あなたたちは、いつまで**どっちつかず**に迷っているのか。もし主が神であるなら、**主に従え**。もしバアルが神であるなら、バアルに従え。」

薪の上に雄牛一頭を裂いて載せ、祈りを捧げます。どちらの神が**火をもって祈りに答える神**でしょうか。先ずバアルとアシェラの預言者 850人が祈り始めました。彼らは大声をあげ、祭壇の周りを跳び回って祈りました。昼過ぎからは、剣や槍で体を傷つけ、血を流してまで狂ったように叫び続けましたが、**火の答え**はありませんでした。

エリヤの番です。彼はイスラエル 12部族を表す 12の石を築いて祭壇を修復し、薪を並べて雄牛を切り裂いて載せました。更に水を十分に注いだ上で祈りました。「アブラハム、イサク、イスラエルの神、**主よ**。あなたがイスラエルにおいて神であられることが、今日明らかになりますように。**主よ、私に答えてください**。そうすればこの民は、**あなたが神である**ことを知るでしょう」

すると主の火が降って、献げ物も薪も石も焼き尽くしました。民は皆ひれ伏して「**主こそ神です**」「**主こそ神です**」と叫びました。そこでバアルとアシェラの預言者は民によって皆捕らえられ、キシヨン川で**殺されて**しまいました。

## [1]日本人の信心と仏教の信仰

江戸時代の国学者**本居宣長**は、日本最初の歴史書「**古事記**」の注釈書「**古事記伝**」(古代文化の最高峰)の著者として有名です。彼は**日本人の信仰**を「人でも生き物や自然の物でも、**尋常ただならざるものを上(かみ)と呼ぶ**」と定義しています。**特別に勝れているものはなんでも「かみ」**にしてしまうというのです。ですから日本では神が「**八百万(やおよろず)の神々**」といわれて、限りなく多いと思われてきました。色々なものに霊が宿っていると考え**る精霊信仰**からくるものでしょう。

日本では、無病息災、商売繁盛、家内安全、それに合格や勝利や交通安全等の祈願のために、人々は**色々な神社やお寺に参詣**し、お札やお守りを頂いて大切に

います。確かに人生には病気の苦しみや商売の苦労を筆頭に、災害や事故から守られ、家族が仲良く暮らし、試験に合格して人生の進路が開けてくるようにという願いを、**皆が切に求めています**。そして**ご利益信仰**に精を出しています。しかしこの信仰の特色は、願いがかなわないとあちらこちらに**転々と移っていく無節操さ**です。

では**仏教**はどうでしょうか。仏教も色々の宗派があっ—口に言えませんが、私が一番心を引かれている仏教徒は、**観世音菩薩像**と**地藏菩薩**の画を書き続けている神戸の**丸山寿美**さんです。静かな**悟りの境地**をひたむきに求めて表現しようとしている作品の一つ一つが、実におだやかな優しさを伝えています。

丸山さんは**法句経**（ほっくぎょう）の次の言葉をよりどころにしています。「**己れ**のよるべは、**己れを措**（お）きて**他になし**。よくととのえし己れこそ、まこと**得難きよるべなり**」自分の頼りになるものは**自分しかいない**。だからよくととのえられた自分になるように、ひたすら精進していこうというのでしょうか。

丸山さんは言います。「悩みもあり 哀しみもあり 幸せも 喜びも数々あれど、**仏**は何時も私のまわりを **ただ静々と通りゆき** 何をか語らん 何をか告げん 知りたくて 悟りたくて ただ一心で **またも 仏の後を追う**」またこう言います。「今日のこの一刻を大切に生きよ 確かに生きよと **私の中の私**が ささやいています」。これは**自己との対話**の世界ですね。

ですから仏像や仏画と対座し、観想しながら**自分をととのえていく**ことに精進する人にとっては、仏像・仏画は**礼拝の対象ではありません**。あるお坊さんが、自分の守っている本堂の見事な仏像を「あんなもの、あってもなくてもかまわない」と言ったそうですが、本当にそうだと思います。**本当の仏教者は、偶像礼拝とは無縁の世界**に生きているのでしょうか。

## [2] 命をはぐくむ言葉

ここにいたって**聖書**によって養われる信仰と**仏教者**の信仰が、全く**質を異にしている**ことが分かってきます。仏教徒は仏が徹底して**沈黙者**なので、**自己との対話に精進**していきます。やはり**無の世界**なのでしょう。これに対して**聖書の神**は、言葉をもって語りかけ、行動を起こされる**人格的実在者**です。**言葉には神の命**が込められています。私たちは神の言葉を真剣に聞き、それに応答することにより、**神の命を**いただいでいくのです。

釧路の丹頂鶴公園の実験によると、**丹頂鶴の卵**は保温器で温められても、最後の10日間**言葉かけ**をされないと、雛が殻を破って生まれてこない。言葉をかけられ続けることによって、卵の内から雛の応答が始まり、殻を自分で破って出て来るのだそうです。私たち**人間**も、まだ目もよく見えない生まれたての時から、母の懷に抱かれ、絶えず**愛の言葉**をかけられていくことによって、**人格が形成**され、人間にな

っていくのです。ですから人間を創造された神が、**言葉をもって私たちに絶えず語りかけ**、私たちの人格を養い育てていこうとされることは、当然ではないでしょうか。

仏教徒は沈黙する仏の前で**自己との対話に精進し**、ととのえられた自己、優れた人格を確立していくといわれます。私はそのような自分との対話に精進する方に深く敬意を抱きます。でも**神との対話と自分との対話**を比べる時、私にとっては真の神との対話の方が、人格を育てていくにあたってはるかに優れていると思えるのです。

何故ならば、私のような者が一人で語り始めると、どうしても手前勝手な**自我のこだわり**から抜け出ることが困難だからです。神よ、ああしてください、こうしてくださいと祈るならば、それは神を召使にして自分の欲を果たそうとする**自己中心的なご利益信仰**ではないでしょうか。神から**正しい命の言葉を聞き**、自我のこだわりから引き離されて、真実に応答していこうとするところで、私の人間としての**在るべき人格**が創られていくのではないのでしょうか。もの言わぬ神をつくって拝むことは、自分を卑しくしていく道だと、私は思うのです。

アメリカで暮す孫の中学1年生**サブリーナ**から証しが届きました。ご紹介させていただきます。

私は6才の時から水泳をしています。平泳ぎが得意で、**誰にも負けない**と思っていました。でも6月の大会で、50メートル、100メートル、200メートル全部、チームメイトに新記録を作られてしまいました。くやしくてたまりませんでした。ほかのチームメイトからも、「もうサブリーナは、だめだ」「これで水泳も終りなんじゃない」と陰口を言われました。

**自信がなくなって**、その次の大会もさんざんでした。リレーでもせっかくカリフォルニアの新記録を作ったと思ったら、私のスタートの足が少し動いたと審判に言われてチームが失格になりました。お母さんは、「お祈りして、どうしたらいいか聞きなさい。」と言いました。毎晩サムエルみたいに、「**神様お話しください**。しもべは聞いております」と祈りました。2週間してもどうしたらいいかわかりませんでした。

ところがある朝の聖書で、詩編34の5節を読みました。「わたしは主に求め、**主は答えてくださった**。脅かすものから常に救い出してください」。7節—8節「この貧しい人が呼び求める声を主は聞き、苦難から常に救ってください。主の使いはその周りに陣を敷き、主を畏れる人を守り助けてください」。神様が、どれだけわたしたちを愛してくださっているか、どれだけ力のある方かということ、もう一度思い出してみたら、不安を全部神様にあげてしまえばいいんだということがわかりました。神様は必ずここから**救い出してください**と信じたら楽になりました。

新記録はどうでもよくなりました。わたしは水泳が好きだから、まだ続けようと思いました。でもテモテ第1の4章7—8節で「**信心のために自分を鍛えなさい**。体の鍛錬も多少は役に立ちますが、信心はこの世と来るべき世での**命を約束する**ので、すべての点で益となるからです。」と

あります。水泳をして体の筋肉や心臓を強くしていくように、信仰の筋肉や心臓も**聖書**を読んで強くしていきたいと思います。

#### 〔結〕 神の言葉に聞き従って生きる

信仰の父と言われた**アブラハム**と**サラ**夫婦には、なかなか子どもが生まれませんでした。そこでサラは、自分の召使**ハガル**にアブラハムの子を生ませて、跡取りにしようと思いました。しかしアブラハムとサラとの間にハガルが割り込んでくることによって、夫婦の愛に亀裂が生じました。そこでサラはハガルを追い出してしまいます（創世記 16 章）。随分手前勝手な話です。でも**夫婦の真剣な一体性と一夫多妻**とは決して両立いたしません。

だとしますと、**神と私との関係**も当然一対一でなければなりません。もしも神を二人・三人持つならば、神と本当に一体となることを求めていることになりません。神と一体にならずにどうして**神の真実の命**を受けることが出来ましょうか。あつちの神と相談し、こつちの神にお願いして、**真実の信仰**が確立するのでしょうか。

「**わたしが主、ほかにはいない。わたしをおいて神はない**」（イザヤ 45 : 5）  
神の前に立つのは私です。右を見、左を見て、さてどうしようかという問題ではないのです。あくまでも私が問われています。私が全身全霊をこめて神の前に立ち、真っ直ぐに神を見上げ、神から真剣に聞き、応答していくことが信仰なのです。そしてそこから、**人間としての真実さ・誠実さ**が生まれてくるのです。

カルメル山での対決で、エリヤは集まって来た民すべてに呼びかけました。「あなたたちは、いつまで**どっちつかずに**迷っているのか。もし**主**が神であるなら**主に従え**。もし**バアル**が神であるならバアルに従え。」

バアルは**大地の生産力**を、地に宿る**超自然的な霊の力**だとして、神格化した神です。しかし雨が降らず飢饉になれば、地は干からびていきます。作物を豊かにもたらず**バアルの力**は衰え、**無力さ**を現します。飢饉になればバアルはどうすることもできないのです。豊かな収穫をもたらす**アシュラ**の女神も同じです。だから預言者 850 人が、朝から午後 3 時まで大声で叫び血を流して呼ばわっても、答えることが出来なかったのは、当然でした。

**偶像**は、ご利益を求める人間が作り上げた、**神に値しない像**でしかありません。それを有り難がらせ、人々に拝ませているのは、その宗教を利用して**自分の支配権を確立しよう**としている、王妃イゼベルの**政治的たくらみ**でした。エリヤの問いかけに民衆が一言も答えられなかったのも、主の預言者を迫害し殺しまくる**イゼベルの権力を恐れた**からでしょう。

支配権力と結びつき、利用されて墮落する**宗教のおぞましさを**、私たちは歴史のなかで繰り返し学んできました。宗教と政治の混同、教会と国家の癒着は、人権を

抑圧し、批判を許さぬ**国家権力の神聖化**と、**教会の世俗権力化**をもたらします。**政教分離の原則**は**バプテスト**の先達が勝ち取ってきた**大切な嗣業**であることを、あらためて自覚したいと思います。

東日本大震災で被災した大船渡市のクリスチャン**山浦玄嗣**（ハルツグ）**医師の証**を読みました。九死に一生を得た山浦さんは、瓦礫の山の中で涙を激しく流します。しかしその時「**わが神わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか**」という十字架上の**主イエスの叫び**が心に響いてきました。そして「**よし、へこたれないぞ**」と決意したそうです。どうしてでしょうか？

主が叫ばれた言葉は、**詩編 22 編**の冒頭の言葉です。主はそれに続く言葉を口になさる前に絶命なさいました。しかしこの詩は次のように歌われています。「私たちの先祖は**貴方に依り頼み**、救われてきた。助けを求めて救い出され、あなたに依り頼んで、裏切られたことはない」。十字架の死という絶望的な状況の中で、主イエスもまた「神がこの自分をお見捨てになることはない」と確信しておられたのです。

山浦さんは全てを押し流された廃墟のただ中に立って、十字架上の主イエスの声を聞きとりました。「そうだ。主イエスと同じように、神は私たちをお見捨てにはならない。**必ず新しい道を開いてくださる**。よし、へこたれないぞ！**神の御用に用いられて働こう**」と決意したのでした。これが神に信頼を寄せ、神からの語りかけを聞きながら、それに答えて生きていく**信仰者**なのですね。

神は命の言葉をもって、私たち一人一人の心に語りかけて下さるお方です。私たちの心からの訴えに、耳を傾け、真実に答えて下さる、父なる神です。どんなに**絶望的**な状況になろうとも、**必ず救いの御業を行われるお方**です。聖書を読みつつ、神の語りかけに耳をすませ、御言葉に聞き従い、神の御用に用いられて生きる人生を歩んで参りましょう。

祈ります：神さま、850 人が体を傷つけて血を流してまで懸命に叫び求めましたが、あなたはエリヤ独りの祈りにお応えになりました。あなたは何よりも先ず、あなたの御心を聞き、その御言葉に聞き従おうとする信仰をお求めになるお方です。み言葉を聞く者にして下さい。私の罪をご自分が引き受けて、肉を裂かれ、血を流して私の罪の裁き受けて下さった、イエス・キリストの十字架の救いを感謝します。キリストの御霊の注ぎを感謝します。あなたの御言葉を常に聞き、御心に従って生きる者にして下さい。私たちの国日本が、決して戦争の罪を繰り返さないように、私たちをお用い下さい。主よ、平和を打ち立てて下さい。一人一人の命を何よりも大切にされるあなたの御心を行う者にして下さい。イエス・キリストの御名によって祈ります。　　アーメン